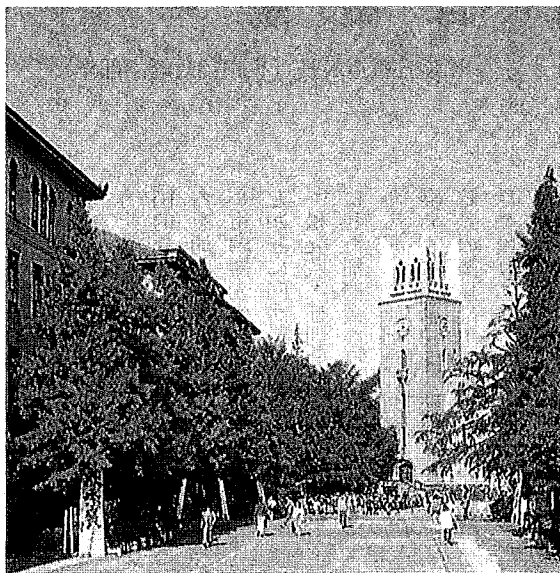


校友会鹿児島県支部総会



奥島 孝康 総長



紙屋 敦之 教授

奥島総長
紙屋教授

を
迎
え
て

7月18日開催



発行 早稲田大学校友会
鹿児島県支部
住所 鹿児島市金生町3-1
山形屋本部秘書室
☎099-227-6310代

紙屋教授(川内市出身)

講演内容紹介

●東アジア史としての

薩琉関係

薩摩と琉球の関係を広く東アジアを視野に入れて考える。一六〇九年に薩摩は琉球出兵を行い、琉球を支配する。だが、一七一九年に薩摩は琉球支配を中国に向かって打ち消す隠蔽政策を実施する。十七世紀末に清王朝の中国支配、また東アジアにおける国際秩序が確立するが、それに日本は改めて対応を迫られたのである。その際、薩摩と琉球の境に位置する七島(吐噶喇列島・現十島村)が隠蔽工作の舞台とされる。東アジアの地図では一点にすぎない七島であるが、日中両国の均衡を保つのに大いに寄与した、というようなことをお話ししたい。

〈かみよのぶゆきプロフィール〉

一九四六年川内市に生まれる。六五年早稲田南高等学校卒業、早稲田大学教育学部へ入学。六九年同学部を卒業、早稲田大学院文学研究科史学専攻修士課程へ入学、さらに博士課程に進み八一年に修了した。日本史、特に江戸時代を中心とする対外関係史を専攻する。初め薩摩藩政史の研究を課題としていたが、薩琉関係の研究に入り、さらに蝦夷地との関係を視野を広げ、そこから江戸時代の対外関係を中国における明から清への王朝交替

スケジュール

| | |
|-------|---|
| *日時 | 平成10年7月18日(土)午後5時より |
| *場所 | 林田ホテル 〒892-0842 鹿児島市東千石12-22 TEL 099-224-4111 |
| *会費 | 7,000円(事務運営費込み) |
| *総長挨拶 | 早稲田大学総長 奥島孝康 |
| *特別講演 | 「東アジア史としての薩琉関係」 早稲田大学文学部教授 紙屋敦之 |
| *総会 | ・平成9年度事業報告及び決算報告の件 ・支部役員改選の件 ・その他 |
| *懇親会 | お楽しみ抽選会他 (大学側出席予定者) 敬称略 |
| | ・早稲田大学 総長 奥島孝康 |
| | ・〃 総長室長 水間英光 |
| | ・〃 総長室秘書課長 花尾能成 |
| | ・早稲田大学 校友会代表幹事 中嶋宏策 |
| | ・〃 総長室校友課長 口元周 (鹿児島県担当校友連携強化員) |
| | ・講師 文学部教授 紙屋敦之 |

松元県支部長

評議員に就任

大学の意思決定機関である評議員会の学外評議員の一人に、松元茂校友会鹿児島県支部長が選任されました。評議員の定数は九十三人、その内訳は学内五十三人、学外四十人。松元氏は、全国十のブロックの内、九州沖繩ブロック枠一人の中で商議員のうちから今回互選されたもので、文字どおり今後九州沖繩の全校友の代表として校友会活動だけにとどまらず、大学の運営にも関わっていくことになる予定です。なお任期は今年七月一日から平成十四年六月三十日までの四年間。

稲門会
ハワイツアー

常夏の島の`光と影`

報告 百田陽一

KKB報道局長 (S40年政経学部卒)



この樹なんの樹、気になる樹一
で始まる日立グループのCM、一
度はTVでご覧になったかと思
う。名前は忘れたが、いかにも南
国的なあの樹が群生しているところ
を通りすぎながらバスはホノル
ル市内観光の最初のスポット、何
とか峠に向かっていた。

松元茂・稲門会県支部長を団長
にした稲門会ハワイツアーは、今
年二月六日午前十一時に鹿児島を
発ち、福岡経由で一路ハワイへ。
時差の関係でホノルルに着いたの
はやはり六日の午前六時半。荷物
はホテルに預けたものの部屋には
入れず、時間調整的な意味合いが
強い市内観光に繰り出したという

次第だ。ツアー前
に説明を聞いてい
るうちに不覚にも
「コックリ」。ハ
ワイの旅はまず、
睡魔との闘いで始
まった。

ホテルはシェラ
トンワイキキ。写
真などで見たこと
があるワイキキ
ビーチが眼前に広
がる。その行く手
には、ダイヤモンド
ヘッドがそそり
立つ。まさに絵葉
▲

コオリナ ゴルフ
クラブで記念撮影

交流会のアトラクションでフラダ
ンス嬢と筆者



書の世界。二月だが、常夏のビ
チは水着かTシャツ、半パンツ
姿。わがルームメイトは、春田滋
さん。ところが、初日から風邪で
ダウン。外で夕食をすませ、ベラ
ンダで水割りを傾けながら夜景を
楽しむ小生の隣で、ホテルの売店
で買ったおにぎりをほおぼってい
た春田さんの姿が忘れられない。
寒い鹿児島から常夏の国へ舞い降
りたせいか、風邪でダウンした人
はほかにも数人出た。

二日目は待望のゴルフ。マイク
ロバスで約一時間、ハワイ島北西
部のKoolinaゴルフクラブ
に向かった。ツアーのメンバーの
馬場弘人JAL鹿児島支店長の案
内で、まず、ゴルフ場のすぐそば
にあるJAL系列のHiliana
iホテルをのぞいた。ホテルの前
には宿泊客用に人工の入り江があ
る豪華さだった。

Koolinaは海沿いの美し
いコースだった。貸しクラブでプ

レイした割には、私にとつては、
90台のいいスコア。しかし、Koolina
の特色は、売店の売上
がプレー収入と肩を並べるほど多
いことだそう。メンバーの少な
くとも二、三人は十万円以上の買
い物をしたと聞く。テントウムシ
のマークがKoolinaのシン
ボル。私もジャンパーとアロハ
シャツを買った。

この日の夕方、この旅のハイラ
イトという公式行事のハワイ地
区稲門会との交流会をシェラトン
で開いた。両会長のあいさつ、自
己紹介、ディナーを取りながら欲
談し、フラダンスを楽しんだ。ハ
ワイの稲門メンバーは、日本企業
のハワイ在住の人を中心に約二十
人。テーブルで隣り合わせになっ
た女性には台湾出身で、スイスの発
電機会社に勤務している人物だっ
た。風邪の春田さんもこの日は、
ゴルフにも参加、交流会でも本来
の陽気さを発揮していた。ゴルフ
には、国会での座り込みから駆け
つけた川内博史代議士も参加し、
交流会でも要を得たスピーチを披
露してくれた。

翌日は終日、自由行動。私はど
こまで乗っても一ドルという市バ
スに乗ってパールハーバーに出掛
けた。ジャーナリストの端くれと
して今世紀の日本にとって最大の
出来事だった太平洋戦争の幕が
切って落とされた現場は踏んでお
きたかった。

ミュージアムで遺品などを見
て、シアターで退役軍人の説明を
聞いたあと、真珠湾攻撃の映像を
見た。そしてランチボートに乗っ
て十分ぐらいのところにある日本
軍によって撃沈された戦艦アリゾ
ナの上に建てられたアリゾナメモ
リアルを訪れた。今も重油が染み
出ている光景は印象的だった。い
ちばん奥のスペースには、一九四
一年十二月七日に犠牲になった一
千七百七十七人のアリゾナ乗組員の
名前が大理石に刻まれていた。

これらの施設見学、ランチ乗船
代は全て無料である。多くの国民
にこの現場を知ってもらいたいと
いう米國政府の考えからだろう。
市内観光で訪れたいいわゆる二世部
隊など第二次世界大戦の戦死者の
墓がよく手入れされ、観光バスは
通過するだけで、降りることがで
きないことなども先の大戦に対す
る米國人のきちつとした考え方が
反映されているように感じた。常
夏のハワイは素晴らしい観光ス
ポットであるとともに、日本人に
とつて戦争とは、と自問を迫られ
る「苦い島」でもある。

ツアー参加者は次の通り。(敬
称略、順不同)

- 松元茂、大西儀朋、加藤一徳、
川知孝則・文代、宮川秀樹、西園
靖彦、春田滋、浜田紘一・万希子、
岩切久治、玉川文生、津曲貞利、
川内博史、馬場弘人・陽子、百田
陽一

ボクの卒業証書

南日本新聞社総務局長

初木 泰 (S47年第一文学部卒)



帰郷してすぐにはなかったか、数年後だったか、母が大学に請求して卒業証書を取り寄せたような気がする。だがすでに両親とも死亡し、遺品の整理をしたが、卒業証書は見当たらなかった。

十数年前、全く突然に疑問を抱いた。自分は早稲田を卒業したと思っているが、本当に卒業したのだろうか？と。

四半世紀以上も前、就職が決まったときに「卒業見込み証明書」を提出した記憶はある。だが「卒業証明書」を提出した記憶が全く無いのである。

文学部構内にあった記念体育館で、卒業式は行われた。その日、ボクはスロープの石段に座って、気分は中途半端だった。卒業式に参列する気持ちはなかったが、とって無関係に新宿辺りをうろつく気分でもなかった。スロープに座り込み、式が終わる、級友たちが体育館から晴れがましい顔で出てくるのを迎えた。『卒業証書は要らない』。記憶はそこで途切れ、このあと級友らと飲み流れたのか、それとも麻雀を始めたのかも定かでない。

一度抱いた不安は容易に消えない。幽霊の存在を信じていないのに、夜、墓場の横を歩く時に自然と急ぎ足になるようなものだ。

元来が、ともに肩を組み、体を左右に揺すって同じ歌を歌うのは好きではなかったし、同窓というだけで初対面から旧知の間柄のように打ち解け合う社交性も持ち合わせていない。加えて「ひよっとして卒業していいのではないのか」という恐怖感があるから、とても「都の西北」を一緒に歌う気分にはなれなかった。

疑念を打ち消すかすかな材料が、毎年届く校友会の会費請求書だった。請求書が届くということは「卒業」しているからに違いない。そう期待した。

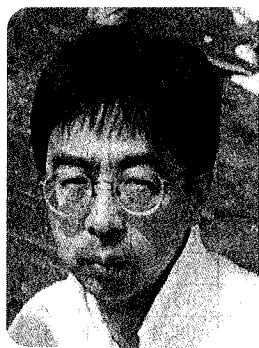
今春異動でこれまでとは知違いのポストで仕事をする事になった。見上げれば、加藤一徳さんがらみをきかせている。斜め前方

には辛島史朗さんが大きな態度で座っている。その辛島さんにこの原稿を「書け」と命じられた。会社が保管する個人情報を見ることのできる人だから、きつとボクも卒業証明書を提出していたに違いない。あの犬野達郎さんだって卒業している(らしい)のだから、

毎日が新鮮だった日々

日本石油基地(株)喜入基地総務部

臺 (ダイ) 敦郎 (S55年教育学部卒)



ボクだって卒業できなかったはずはないんだ。大野さんのことにもっと早く気づくべきだった！そんなこんなで、これまで距離を置いていた「紺碧」に登場する事になった。五十歳の新人であります。よろしく。それにしてもボクの卒業証書はどこにあるのだろう。

普通より少し長い学生生活を送ったため何年生だったか思い出せない。太宰治がこの世に生まれていなければ、かの名作「走れメロス」はこの僕が書いたであろう？ という話から始めよう。

雪が降り出しそうな薄曇りの寒い日だった。僕と友人Mは、早稲田通りと明治通りが交わる角の喫茶店にいた。サンドウィッチをたらいらげ、コーヒーを飲み、次は何を頼もうか思案中であった。ここ二、三日インスタントラーメン

MとSの信頼関係はより強固なものとなっていた。早慶戦の前夜、神宮に泊り込んでいる。我々の卓越した宴会芸は周りのグループを圧倒し、ヤンヤの喝采をあげた。しかし翌日開門になったとき、我々のだれ一人も入場券(前売りでしか手に入らない)を持っていなかった。数号前にKTSの松元が紹介した謎の台湾人留学生リンと知り合ったのもこの時だ。我が家にもリンを泊めた。一緒に泊まった後輩Kはジャパニーズカスタムといながら、リンのふとんに潜り込み、抱きついていった。本当は日本人であるリンは何を思っただろうか。徹夜麻雀の帰りに雀荘を見つけ、一人が麻雀でもやるか言い出し、冗談が本当になってしまったこともあった。この話は書き出すときりがないのでやめよう。

卒業して十八年がたった。いまや教授の名前も学んだことも全く思い出せない。早い話が勉強なんて何もしなかったからだ。しかし後悔は何もしていない。何故なら、我々はそれぞれが好き勝手なことをしながらも間違いなく切磋琢磨、成長していったからだ。決して勉強しなかったことを自己弁護しているのではない。信じあえる友人たちと早稲田という不思議な魅力を持つ環境の中で過ごした。それが我々をいつのまにか成長させてくれたのだと思う。

第26回 早慶対抗ゴルフ大会

| 順位 | 氏名 | 出身校 | OUT | IN | トータル | HDCP | ネット |
|----|-------|-----|-----|----|------|------|------|
| 1 | 岩元 恭一 | 慶 | 43 | 45 | 88 | 15.6 | 72.4 |
| 2 | 永野 学 | 慶 | 49 | 42 | 91 | 18.0 | 73.0 |
| 3 | 丸元 正樹 | 慶 | 39 | 39 | 78 | 4.8 | 73.2 |
| 4 | 上原 昌徳 | 慶 | 48 | 42 | 90 | 16.8 | 73.2 |
| 5 | 本坊 浩幸 | 慶 | 42 | 41 | 83 | 9.6 | 73.4 |
| 6 | 山本 正垣 | 慶 | 44 | 39 | 83 | 9.6 | 73.4 |
| 6 | 馬場 弘人 | 早 | 44 | 39 | 83 | 9.6 | 73.4 |
| 8 | 尾堂 友紀 | 早 | 49 | 45 | 94 | 20.4 | 73.6 |
| 9 | 吉富 信雄 | 慶 | 47 | 44 | 91 | 16.8 | 74.2 |
| 10 | 大西 儀朋 | 早 | 49 | 42 | 91 | 16.8 | 74.2 |
| 11 | 上原 敏 | 早 | 47 | 38 | 85 | 10.8 | 74.2 |
| 12 | 本坊 吉朗 | 慶 | 53 | 44 | 97 | 22.8 | 74.2 |
| 13 | 春田 滋 | 早 | 46 | 38 | 84 | 9.6 | 74.4 |
| 14 | 堅山 博美 | 早 | 49 | 44 | 93 | 18.0 | 75.0 |
| 15 | 西園 靖彦 | 早 | 48 | 44 | 92 | 16.8 | 75.2 |
| 16 | 百田 陽一 | 早 | 50 | 42 | 92 | 16.8 | 75.2 |
| 17 | 大津 学 | 早 | 50 | 47 | 97 | 21.6 | 75.4 |
| 18 | 濱田 敏一 | 早 | 53 | 50 | 103 | 27.6 | 75.4 |
| 19 | 月田 好彦 | 早 | 51 | 46 | 97 | 21.6 | 75.4 |
| 20 | 岩下 吉廣 | 早 | 46 | 44 | 90 | 14.4 | 75.6 |
| 21 | 川畑 孝則 | 早 | 39 | 37 | 76 | 0.0 | 76.0 |
| 22 | 西 純一郎 | 早 | 55 | 50 | 105 | 28.8 | 76.2 |
| 23 | 大西 洋逸 | 早 | 50 | 50 | 100 | 22.8 | 77.2 |
| 24 | 本坊 修 | 慶 | 51 | 41 | 92 | 14.4 | 77.6 |
| 25 | 石原 石 | 慶 | 48 | 43 | 91 | 13.2 | 77.8 |
| 26 | 内村 二郎 | 慶 | 48 | 48 | 96 | 16.8 | 79.2 |
| 27 | 玉川 文生 | 早 | 49 | 45 | 94 | 13.2 | 80.8 |
| 28 | 菊地 龍夫 | 早 | 61 | 55 | 116 | 34.8 | 81.2 |
| 29 | 増留 貴朗 | 早 | 51 | 45 | 96 | 14.4 | 81.6 |
| 30 | 田中 健作 | 早 | 51 | 46 | 97 | 14.4 | 82.6 |
| 31 | 本坊 松美 | 慶 | 57 | 46 | 103 | 20.4 | 82.6 |
| 32 | 中尾 成昭 | 慶 | 59 | 48 | 107 | 24.0 | 83.0 |
| 33 | 鷹栖 丈治 | 慶 | 63 | 63 | 126 | 36.0 | 90.0 |
| 34 | 佐名木高広 | 早 | 73 | 55 | 128 | 36.0 | 92.0 |

第26回早慶対抗ゴルフ大会

去る四月十八日(土)霧島GCにおいて、第二十六回早慶対抗ゴルフ大会が開催されました。昨年の秋は予約がとれずに中止となったため、久しぶりに稲門・三田の精

鋭が霧島の地において熱い戦いを展開しました。我が稲門は、総勢二十人と過去にもない参加があり、三田を六人も上回り、戦う前から「勝負あり」の聲が高かったのですが、順位表のように上位五位までが三田というダブルペリアでも稀にみる運の

悪さで三田に勝利を許してしまいました。個人戦では、何と岩元恭一氏が、クロス88・ネット72・4のスコアで優勝。これには、両校とも驚きを隠せないようでした。やっと一矢を報いたのは、ベストクロスに輝いた川畑孝則氏でアウト39・イン37の76で回り、なんとか面目を保ちました。通算成績は、稲門9勝・三田17勝とまた差が開いてしまいました。次回は何としても雪辱をとり奮起を期待いたします。なお、優勝校スピーチでの岩元主将の内容は、書くまでもありません。秋は必勝を期して紺碧の空を歌いま

またも惜敗！ 春の早慶ゴルフ大会

慶応に3.6ポイント差

しよう。 幹事・大西儀朋 (S59年教育学部卒) 鹿児島海陸運送(株)取締役

上位十人ずつの成績

- ・慶応大学 742・4ポイント
- ・早稲田大学 746ポイント

したがって3.6ポイント差で慶応義塾大学の勝利

校友会県支部名譽顧問で長年同支部の運営に尽力されてきた越山純雄さん(S15年法学部卒)が去る三月十二日、亡くなられました。八十六歳でした。心からご冥福をお祈りします。

編集後記

会報委員

- 吉田 守 久保英司
- 辛島史朗 大西儀朋

早稲田ウィークリー 発行 早稲田大学学生部 「えび茶ゾーン」より

いやー、驚いてしまった。二十人以下の授業が全体の四分の一、二十〜五十人は四割と、早大の七割弱のクラスが五十人以上なのである。演習以外の一般授業でも、十人以下、五人以下のクラスがかなりある。一九六〇年代前半に学生であった私の場合、卒業単位にはならない露語クラスで、始めは五人、最後は私一人になったことがある。準備は大変だったものの、充実した授業だったと記憶する。マスプロ授業との批判があり、抽選で落ちる仕組みへのクレームも強い。希望する科目・クラス数を増やす努力が大学に求められるが、同時に小規模クラスを負担の重さゆえに避けることすれば、もつたないことである▼もつたないといえ

ば、電子メールやインターネットを利用しない人も、使える資源を放棄しているといえよう。メーリング・リストを使い、全員の連絡網から論文の公開・討論へ進んでいるゼミが多く出ている。パソコンが通信に拡大され利用度が一気に高まっている。大学もキャンパスの固定端末機台数の増加だけでなく、自宅からアクセスする回線増加なり仕組みを考え二十四時間、十分に使えるようにしてほしい▼図書館を十分に使いきらずに卒業してしまった、という話もよく聞く。まだ行ってないフロアがあると三年生のゼミで話題になったことがあった。自宅から図書パソコンで検索し世界の資料をホームページで集める人もいれば、片や触ったこともない人までいて、身近な情報交換不足を嘆いたものである。(五)